

# 武蔵野

## ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を  
楽しみながら学ぶ

—むさしの文学館 #1—

武蔵野市ゆかりの  
文学者たちの人生、作品世界、  
市との関わりなどを紹介します。

# 丹羽文雄



健康的かつおっとりとした風情で、「文学青年的でなかった」と言われた丹羽文雄氏。映画会社に俳優としてスカウトされたこともある。

### 来歴

明治37年	三重県四日市市の浄土真宗高田派崇顕寺に生まれる。三重県富田中学校卒業後、早稲田大学第一高等学院に入学。在学中尾崎一雄と知り合い、同人誌で小説を発表する。
昭和4年	早稲田大学文学部国文科卒業。
昭和7～12年	生家の寺で僧職に就くが、小説『鮎』が文壇で注目されたことをきっかけに上京。僧職を捨て、小説家として活躍を始める。
昭和10～20年	戦時中の従軍経験をまとめた戦記物小説『海戦』ほか、市井事をテーマにした小説を発表。
昭和21～51年	流行作家として名を馳せ、『厭(いや)がらせの年齢』は流行語となる。同人誌『文学者』を主宰し、武蔵野市の自宅サロンでは、瀬戸内寂聴や吉村昭、津村節子といった後の人気作家が交流を深めた。『爬虫類』『青変』『親鸞』などを発表し、小説化として精力的に活躍。
昭和52年	文化勲章を受章。
平成4年	武蔵野市名誉市民に推挙される。
平成17年	肺炎のため武蔵野市の自宅で逝去。

### 数々の文学賞を受賞した 昭和の流行作家

武蔵野市の名誉市民である丹羽文雄氏は、昭和7年に雑誌『文藝春秋』に発表した小説『鮎』をきっかけに流行作家として活躍しました。生涯で十万余枚を超える原稿を書いたと言われています。『東京の女性』など20作以上の作品が映画化され、多数の文学賞を受賞し、昭和52年には文化勲章を受賞しています。日本文藝家協会の会長や、芥川賞をはじめとする数々の文学賞の選考委員も務めました。武蔵野市に住んでいた丹羽氏

は平成4年、武蔵野市制45周年式典において、市民としてその功績を未永くたたえるため、名誉市民の称号を贈られました。

丹羽文雄氏が生まれたのは、三重県四日市市にある浄土真宗の寺でした。住職を継ぐべき長男として育てられましたが、4歳で実母が旅役者を追って出奔。複雑な家庭環境と両親への想いは、丹羽氏の多くの作品に反映されています。

早稲田大学進学のために上京後、文学を志す友人、尾崎一雄から教えられた志賀直哉の小説には、特に大きな影響を受けたといわれています。

### 文学者たちが集う 武蔵野市の丹羽邸

丹羽文雄氏は小説家としてはもちろん、文学雑誌『文学者』の主宰者としても知られています。

昭和23年、流行作家として名を馳せていた丹羽氏を中心に、文学者が集う「十五日会」を結成。会には石川達三、田村泰次郎、火野葦平、尾崎一雄、井伏鱒二などそうそうたるメンバーが連なり、「文学者がこれほど多く一同に会して話し合うことは、絶後とはいわぬが空前のことである」と言われたほどでした(『十五日会と「文学者」より』)。

「十五日会」の雑誌として刊行された『文学者』は、第一線で活躍する小説家が作品を発表する場であり、新人作家にとっては文壇への登竜門でもありました。丹羽氏は後進の育成にも力を注ぎ、河野多恵子、立原正

秋、津村節子、吉村昭、瀬戸内寂聴ら  
をこの『文学者』から人気作家へと  
育てていきました。作家を目指す者  
にとって、当時『文学者』は憧れの存  
在となっていました。

武蔵野市西久保にあつた丹羽邸の  
応接間は、『文学者』の編集会議を  
行つたり、作家を志す者たちが丹羽  
氏に教えを請う場として使われてい  
ました。新たに書斎を設けた際は、

「書斎開きの会」に作家や編集者も  
ちろん、東宝のスター女優までが足  
を運んだといわれます。『文学者』  
の編集会議を丹羽家で前記の編集委  
員の人たちと済ませたと、料理研  
究家として名のあつた奥さんとお嬢  
さんが二人がかりでもてなして下  
さつた（『追悼 丹羽文雄』より）とい  
う一文のように、当時の丹羽邸は、  
文学サロンとして多くの文化人たちが  
が集う場となつていたようです。

津村節子は『瑠璃色の石』という  
作品の中で、「丹羽邸は三鷹駅にほ  
ど近い閑静な住宅街にあり、南側の  
道路に面して生垣が続く、その先に  
門があつた。植込みのあるアプロ  
ーチが玄関まで続き、右側の垣には前  
庭に通じる木戸があつた」「丹羽の面  
会日は毎週月曜日の午後で、その日  
ならば初対面で紹介者のないもので

も、応接室に入れてくれると聞いて  
いる」と記しています。また瀬戸内  
寂聴の私小説『場所』にも、「三鷹の  
駅の踏切を渡つて北口に出ると、上  
水に沿つた路があり、そこをたどる  
と、大きな丹羽文雄邸があつた」と  
いう一節があります。

**作家たちに戦いの場を  
与える雑誌『文学者』**

『文学者』は何度かの休刊を経なが  
ら刊行を続け、昭和49年の四月号で  
25年にわたる歴史に幕を閉じまし

た。雑誌の発行費用のほとんどは、  
当時人気作家として活躍していた丹  
羽氏が負担していましたが、編集方  
針にはほとんど口を挟まず、作品の  
掲載の是非については編集委員たち  
が合評会によつて決めていました。  
丹羽氏の『文学者』に対する情熱は、  
どこからきていたのでしょうか。

『丹羽文雄文藝事典』の著者、秦昌  
弘さんによると、丹羽氏は「丹羽家  
からは小説家を出さない」と言つて  
いたそうです。文学の厳しき、創作  
を続けることの難しさを知り尽くし

た丹羽氏にとつて、小説家という職  
業はわが子、孫らに勧めることがで  
きない職業だつたのでしょうか。「丹  
羽文雄があえて『文学者』の編集に  
口を挟まないことによつて、論議が  
生まれ、時には感情のぶつかり合い  
や、作家同士のねたみ、そねみが  
あつたかもしれません。そこから這  
い上がれない者には、作家として大  
成できないと考へていたのではない  
でしょうか」と秦氏は語ります。  
平成17年、丹羽文雄氏は西久保の  
自宅で逝去。享年百歳でした。

**丹羽文雄記念室（三重県四日市市）**

**数々の文学者が生まれた部屋**

四日市市立博物館内にある丹羽文雄記念室では、武蔵野市にあつた丹羽邸の応接間を再現しています。ここに雑誌『文学者』の仲間たちが集まり、文学談義を交わし、丹羽氏との交流を重ねていました。



上) 丹羽氏は応接間の暖炉を背にソファに腰掛けて、訪れる人を迎えていました。(写真提供/四日市市立博物館)

下) 丹羽文雄記念室では、丹羽氏が愛用し、多くの作品を生み出した書斎机も見ることができます。(写真提供/四日市市立博物館)

所在地：三重県四日市市安島1-3-16四日市市立博物館3階 常設展示室  
利用時間：午前9時30分～午後5時/休館日：月曜（祝日の場合は翌日）、年末年始、館内整備日

**丹羽文雄に触れる  
この2冊**



**『親鸞』**

宗教者、親鸞に魅入られた丹羽氏が自ら「ライフワーク」と称した作品。産経新聞にて連載され、人間の業を描き出した。(新潮文庫)

**『鮎・母の日・妻』**

自分を捨てた実母への複雑な想いをつづり、文壇デビュー作となつた『鮎』や、処女作品『秋』など10篇を収録。(講談社文芸文庫)